

琉球大学学術リポジトリ

北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究： ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に(2)

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): ハワイ, アメリカ合衆国本土, カナダ, 沖縄県出身移民, 面接聞取調査 キーワード (En): 作成者: 石川, 友紀, Ishikawa, Tomonori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010099

北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究 —ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に(Ⅱ)—

石川友紀

- I. はじめに
- II. ハワイ一世移民の現地調査証言の事例(前号よりつづく)
- III. アメリカ合衆国本土・カナダにおける県系移民の現地調査(1993年)
- IV. 北米県系移民現地調査における主な収集資料

キーワード: ハワイ, アメリカ合衆国本土, カナダ, 沖縄県出身移民, 面接聞取調査

I. はじめに

グローバル化時代の今日, かつて世界に雄飛した沖縄県出身移民に関する地理学的研究はもっとあってもよさそうであるが, 現実はずしもそうではない。県から海外へ出た移民は110年余の歴史をもち, 6世まで出生し, 今や約40万人の県系移民が世界の各地に在住していると言われている。なかでも, 移民一世は二世また三世等のルーツとして重要な位置を占める。一世移民の存在意義は大きい。そのため, 海外在住の県系移民の現地調査を行い, 一世移民の証言記録を残しておく必要がある。これまで「移民県」沖縄にあっては, 1990年代以降各市町村において, 市町村史誌の中で「移民・出稼ぎ」編を刊行してきた。すでに沖縄本島14市町村でその成果が現れ, 現在進行中の市町村史誌もみられる¹⁾。

本稿では本冊の前号(『移民研究』第9号)で発表した文部省科学研究費補助金による「北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究—ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に(Ⅰ)—」にひきつづき, 同テーマの(Ⅱ)として, 北米のハワイ・アメリカ合衆国本土・カナダにおける県系移民の現地調査の状況を取り上げる²⁾。なお, 本研究プロジェクトとの関連論文として石丸哲史(2003)「アメリカ合衆国における沖縄県出身移住者に関する地理学的検討」『沖縄地理』第6号も参考となる。

II. ハワイ一世移民の現地調査証言の事例(前号よりつづく)

(1) 幸地千代子(旧姓オミト)

1903年(明治36年)11月1日生。オアフ島ホノルル市で1992年9月17日に面接聞取。調査時88歳。首里市赤平町出身。父翁長助之・母マカトの長女。夫幸地朝則は尚家系の孫。首里城下にあった首里女子工芸学校を卒業した。

1919年（大正8）12月15歳のとき、すでにハワイに移民していた父の呼び寄せで、母と弟と3人日本丸でホノルル港に着いた。

渡航後、1919年から約2年間マウイ島ワイルクキャンプで、白人の家庭奉公人として働いた。1921年同島ハイク耕地へ移り、パイナップルの缶詰工場で働いた。賃金は一時間10セントであった。1922年ごろマウイ島ワイルクへ戻り、約2年間父の兄弟が経営するサトウキビ耕地で働いた。1924年ごろマウイ島カフルイに移り、約20年間夫は大西商會に勤めた。戦後1950年ごろオアフ島ホノルル市に出てきて、子供が成長し働くようになったので隠居の身となった。移民当時から永住のつもりであった。1955年にアメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が2人、女性が2人で計4人である。子供は男性が2人、女性が6人で計8人である。現在1人でマンションに住んでいるが、階違いに娘も住んでいて、面倒をみてもらっている。

仏壇はないが、墓はヌアヌ地区にある。宗教は基督教のプロテスタントである。家庭での言語はすべて日本語を使用してきた。沖縄料理はよく作り、ユシドーフやサーターアンダギーが好きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』や『ハワイパシフィックプレス』を購読している。情報源としては日本語によるラジオを聞き、テレビを観る。同郷人団体としては首里クラブと同婦人会に所属する。ラナキラクラブと豊寿の会の会員である。

場合は参加したことがない。銀行はよく利用する。送金は戦前何回か行ったことがある。郷里への一時帰国は夫は4、5回あるが、私はいまだ帰郷したことがない。

(2) 糸満盛悦（いとみつ・せいえつ）

1902年（明治35）9月30日生。オアフ島ホノルル市で1992年9月17日に面接聞取。調査時89歳。首里市汀良町出身。父糸満盛敦の2男、県立師範附属小学校を卒業し、高等科2年を修了。県立第一中学校へ進学し、2年生のときに中退した。

1920年（大正9）10月18歳のとき、すでにハワイに移民していた父の呼び寄せで、母と弟と3人春洋丸でホノルル港に着いた。外務省の「海外旅券下付表」によると、糸満盛悦は那覇区上泉町の2丁目20番地に本籍のある盛輔弟盛敦2男で、18歳1ヵ月のときハワイへ父の呼び寄せとして、大正9年9月8日に旅券が下付されている³⁾。同様弟盛敦3男盛喜も15歳11ヵ月で、父の呼び寄せで同日旅券が下付されている。

渡航後、1920年オアフ島ホノルル市ヌアヌ地区で、ミッドフィックスクールに通い、英語の勉強をした。1925年ホノルル市パワーのパイナップル工場で働いた。そのときの時給は20セントであった。1926年同市ククイストリートに移り、ハウスボーイ（家庭奉公人）の仕事をした。月給は75ドルであった。

1941年ごろホノルル市のタイムスーパーの近くで、貸家として古いハウスを買い取り、アパート経営をした。1967年以後カイクセロパホアで、子供が事務所をもったので、その後隠居の生活をしている。移民当時は出稼ぎのつもりであったが、戦後子供が成長したので、永住の決意をし、アメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性のみの3人である。子供は男性が2人、女性が5人で計7人である。孫が13人、ひ孫が9人いる。家屋・宅地は自己所有で、アパートの貸家を一軒もっている。墓地はヌアナ地区にあり、本願寺に所属する。家庭での言語は親子は英語で話す、夫婦や家族の会話はすべて日本語である。沖縄料理は長男嫁がよく作るが、クープイリチーが好物である。

邦字新聞は『ハワイ報知』と『ハワイパシフィックプレス』を購読する。英字新聞の『スターブリテン』も読む。日本語のラジオを聞き、テレビを観る。所属する団体はハワイ年長者クラブとカイクセ老人クラブである。

場合は毎月1回参加し、銀行も利用する。郷里への送金は戦前も戦後も行ったことがある。沖縄への戦災救援運動の際にはお金を寄付した。郷里への一時帰国は1960年、83年を含めて4回ある。

(3) 島福カメ（旧姓島袋）

1901年（明治34）9月8日生。オアフ島ホノルル市で1922年9月17日に面接聞取。調査時91歳。美里村字比屋根出身。父島袋蒲・母ナベの2女。美東尋常高等小学校を卒業し、卒業後家業のサトウキビ作りなどの農業の手伝いをしていた。

1920年（大正9）19歳の時、ハワイへ移民していた兄宮里亀の呼び寄せで、サイベリア号で出航し、ホノルル港に着いた。

渡航後、1920年兄のいるマウイ島ブネネのサトウキビ耕地で働いた。サトウキビを6本束ねにするパイラメンの仕事であった。1922年同島カフク耕地へ移り、サトウキビ耕地で約6年間働いた。1928年オアフ島ホノルル市モイリリーに移り、10年余パイナップル工場の従業員となった。

太平洋戦争中49日間仕事ができなくなり、1945年2月11日に、神様のお使いとして天からのお告げがあった。祖先をたどると、祖母はヌール（ノロ・神女）であった。以後現在までここホノルル市アヘコロ街2559番地でユタの仕事をしている。移民当時は出稼ぎのつもりであったが、現在は永住を決意し、アメリカの国籍を取得している。

兄弟姉妹は男性が1人、女性が2人で計3人である。子供は女性のみの5人である。孫が11人、ひ孫が3人いる。家屋・宅地は自己所有である。仏壇はないが、ユタ関係の飾り物や書物がある。宗教はユタである。家庭での言語は夫婦・親子は沖縄方言と日本語を併用し、家族の場合は日本語を話す。沖縄料理はよく作り、ヨモギやジュシーメーが好

きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』と『ハワイパシフィックプレス』を購読している。英字新聞は読まない。ラジオも聞かず、テレビも観ない。同郷人の団体としては、沖縄県人連合会と「がじゅまる会」に所属している。

場合はかつて参加したことはある。銀行はよく利用する。郷里への送金は戦前したことはあるが、戦後はない。終戦直後、沖縄へ戦災救援物資を送った。一時帰国は何回かある。

(4) 安里常琉

1906年(明治39)8月5日生。マウイ島カフルイで1992年9月19日に面接聞取。調査時86歳。中城村字喜舎場出身。父安里常栄・母カマの長男、妻は二世で仲村昇の妹(大正4年生)。喜舎場尋常高等小学校を卒業、高等科2年を修了した。卒業後、4歳の時に父が亡くなったので、サトウキビ・サツマイモ・米を栽培していた農家の母の手伝いをしていた。

1924年(大正13)徴兵前の18歳の時、ハワイに移民していたおじの安里常吉の養子として、単身ハワイへ渡航した。

渡航後、1924年マウイ島カフルイでおじの安里喜永宅で約3週間滞在した。次いで同島パイヤのカヘカキャンプのおじ安里常吉のところで、約1ヵ月間独身者のための弁当作りのコックの仕事をした。その後3年間同地でコンパンというサトウキビ請負業の仕事をした。1927年ごろマウイ島パイヤのハレポーロイン会社、ついでシュガーミール会社で働いた。最後はマウイ島カフルイのサトウキビ工場で32年間働いた。移民当時は出稼ぎのつもりであったが、1957年にアメリカ国籍を取得し、現在永住の決意である。

兄弟姉妹は男性が2人、女性が1人で計3人である。孫が1人、ひ孫が1人いる。同居家族は妻との2人である。家屋・宅地は自己所有で、仏壇と墓もある。宗教は仏教で臨済宗である。家庭での言語は夫婦は日本語と沖縄方言で話し、親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理をよく作り、ラフテー・アシテビチ・ゴーヤーが好きで、ポーク缶詰もよく利用する。

邦字新聞は『ハワイ報知』『ハワイパシフィックプレス』を購読する。日本語のラジオを聞き、テレビは英語・日本語のものを観る。日本語のビデオもよく観る。同郷人団体はマウイ沖縄県人会に所属する。

場合は月一回一口25ドルのものに参加している。銀行もよく利用する。郷里への送金は戦前80円送った。戦後は沖縄への戦災救援物資を送った。郷里への一時帰国は1954年母の米寿の祝いを含めて6回ある。

(5) 仲宗根真章

1907年(明治40)4月20日生。マウイ島カフルイで1992年9月19日面接聞取。調査

時 85 歳。具志川村字安慶名 82 番地出身。父仲宗根仁一・母カマの長男。妻マツ（明治 43 年生）はハワイ二世。具志川尋常高等小学校を卒業し、高等科 2 年を修了する。卒業後 1 年間祖父の農業の手伝いをしていた。戦前サトウキビ畑が約 2,000 坪もあり、住宅は瓦ぶきで、裕福な家庭であった。

1923 年（大正 12）3 月 4 日 16 歳の時、父の呼び寄せで母と 2 人ハワイへ渡航した。徳田移民会社の斡旋により那覇港を出航し、神戸までいった。神戸での身体検査では 12 指腸虫の検査などで 1 週間も滞在した。大洋丸でハワイのホノルル港に到着した。ホノルルの移民局での検査は無事パスした。そのときの通訳官は田島朝明氏（首里市出身）であった。

渡航後、1923 年 2 ヶ月間マウイ島カハナキャンプのサトウキビ耕地で、父と共に労働者として働いた。その仕事とは 18～20 ヶ所の広大なサトウキビ畑に水をかけることで、賃金は一日 1 ドルであった。その後同島ラハイナのホノカワキャンプのサトウキビ畑で 18 年間働いた。朝 4 時起床、朝食を済ませ、弁当を持って 5 時に馬で耕地へ向かった。夕食など食事はうどんや汁物・野菜がでて、牛肉や豚肉もあったが高価であった。

1941 年マウイ島パイアのカイルアキャンプのサトウキビ耕地でウチナンチュと一緒に、キビの請負いの仕事をした。戦後もカイルアのサトウキビ耕地で働き、併せて 22 年間もその地にいた。その後、同島カフルイのサトウキビ会社で 29 年間働いた。賃金は一日 1 ドル 80 セントに上昇していた。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが、子供ができて 1931 年ごろから永住の決意をした。1978 年ごろにアメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が 1 人、女性が 2 人で計 3 人である。子供は男性が 3 人、女性が 1 人で計 4 人である。孫が 12 人、ひ孫が 1 人いる。現在同居家族は 2 人である。家屋・宅地ともに自己所有である。仏壇・墓地はない。宗教は仏教の浄土宗で、ワイルク浄土寺の信徒である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し、親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理はよく作り、ゴーヤーチャンプルー・トーフウブサー・アシティビチが好きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』と『ハワイパシフィックプレス』を購読している。ラジオとテレビは日本語と英語の両言語のものを、聞いたり観たりしている。日本語の雑誌を読み、ビデオを観る。

模合は参加していない。銀行はよく利用する。郷里への送金は戦前も戦後も行った。戦後沖縄へ被災救援物資を送った。郷里への一時帰国は戦後 1957 年を皮切りに、1990 年ごろまで合計 7 回ある。

(6) 又吉松

1896 年（明治 29）11 月 26 日生。マウイ島カフルイで 1992 年 9 月 19 日に面接聞取。調査時 95 歳。浦添村字仲間 231 番地出身。父又吉武忠・母カマの 2 男。妻ツルはハワイ二世で父は同郷の島袋賀真。浦添尋常高等小学校を卒業し、高等科 2 年を修了した。

1911年(明治44)15歳の時、父の呼び寄せで、単身ハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると、又吉松は浦添村字仲間231番地に本籍のある戸主武中の二男で、14歳8カ月の時、ハワイへ父の呼び寄せとして、明治44年6月17日に旅券が下付されている⁴⁾。那覇から神戸を経由、サイベリア号で横浜を出航し、ホノルル港へ到着した。港には父がおばと一緒に迎えに来てくれた。

渡航後、最初の1ヵ月間はオアフ島ワイパフのサトウキビ耕地で働いた。ついで、ハワイ島ホノム耕地三番のサトウキビ耕地で6年間働いた。その後、同島ペペケオのサトウキビ耕地で1ヵ月間仕事をした。同地で友人が食料品を経営していた丸山商店で、その店員を1年間勤めた。

今度はカウアイ島へ移り、2年半肉屋のドライバーをした。その後、オアフ島ホノルル市ハウラで7ヵ月間、ホノルル鉄道コンパニーの鉄道工夫として働いた。賃金は一日2ドル25セントであったと記憶している。マウイ島カフクの上へ移り、沖縄県人が経営しているパイナップル工場で働いた。その後、モロカイ島へ移り、3ヵ月間トンネル掘りの仕事をした。賃金は一日3ドル50セントであった。そこをやめ、ラナイ島のパイナップル耕地で働いた。賃金は一日3ドル10セントであった。1925年から26年にかけて約1ヵ月間沖縄へ帰った。その間に日本本土の観光地で、東京の二重橋や大阪城などを見学した。再渡航後、マウイ島へ移り、石工として石割りの仕事をした。移民した当時は4、5年で帰国するつもりであったが、子供の成長とともに永住を決意した。1958年アメリカ国籍を取得す。

兄弟姉妹は男性が3人、女性が4人で計7人である。子供は男性が3人、女性が3人で計6人である。孫は12人、ひ孫は8人いる。現在同居家族は3人である。家屋・住宅は自己所有である。仏壇も墓地もない。宗教は仏教で浄土宗を信仰している。家庭での言語は妻とは日本語を話し、親子・家族は英語を使用する。沖縄料理はよく作り、トーフ・アシティビチが好きである。

邦字新聞は購読していない。ラジオも聞かず、テレビも観ない。同郷人団体はマウイ沖縄県人会に所属する。模合は参加していない。銀行は利用する。郷里への送金は戦前行ったことがある。郷里への一時帰国は1973年を含めて合計2回ある。

(7) 比嘉チヨノ

1904年(明治37)12月19日生。マウイ島カフルイで1992年9月19日に面接聞取。調査時87歳。中城村喜舎場出身。父安座間ようほう・母カマドの2女。夫比嘉昌栄。喜舎場尋常高等小学校を卒業し、補習科2年を修了した。

1923年(大正12)5月21日18歳の時、夫の呼び寄せでハワイへ渡航した。そのルートは写真結婚の形式で、ハワイ移民の夫から手紙をもらい移民の手続きをし、那覇港を出

航、神戸に滞在したのち、同行者 8 人とともに大洋丸でホノルル港に着いた。

渡航後、1923 年マウイ島カイルアのサトウキビ耕地で 8 年間働いた。また、夫婦でコックとしても働き、お金を貯めた。1931 年頃同島クラに移り、3 年間パイナップル耕地で働いた。その後マウイ島パイアのサトウキビ工場へ移り、戦争中まで働いた。

戦後 1946 年マウイ島カフルイで 8 年間、比嘉トーフ屋を経営し、トーフ作りをした。1955 年以後はトーフ屋とともに、豚 11、12 頭を飼う養豚業も行った。アメリカ国籍を取得したが、その年月日は覚えていない。

兄弟姉妹は男性が 3 人、女性が 2 人で計 5 人である。子供は同じく男性が 3 人、女性が 2 人で計 5 人である。孫が 15 人、ひ孫が 14 人いる。同居家族はなく、現在一人暮らしである。家屋・宅地ともに自己所有である。仏壇も墓地もある。墓地は公的機関のボックス式で、メモリアルデイに墓参りをする。宗教はパプテストでユニオンチャーチで礼拝する。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し、親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理はよく作り、コンブ・ゴーヤーを使い、アンダギーが好きである。

邦字新聞は『ハワイパシフィックプレス』を購読している。日本語のラジオを聞き、テレビを観、雑誌を読む。同郷人団体はマウイ沖縄県人会に所属する。以前は喜舎場・仲順などの中城村人の集会もあった。

場合は友達同士で親睦のため、月一回参加している。銀行も利用する。郷里へ送金したことはない。戦後は沖縄へ戦災救援物資として、米・油など食料品を送った。郷里への一時帰国は戦後で、1952 年・79 年を含めて合計 3 回ある。

(8) 山城ゴセ

1899 年（明治 32）生。マウイ島カフルイで 1992 年 9 月 19 日面接聞取。調査時 93 歳。糸満町字糸満出身。父宮城蒲・母ゴゼイの長女。夫山城蒲は高嶺村字大里出身。糸満尋常高等小学校を卒業した。卒業後郷里で母に見慣って魚売りの行商をした。実家は畑があり、サツマイモ・野菜作りをし、山羊も飼っていた。

1916 年（大正 5）16 歳の時、父の呼寄せで単身ハワイへ渡航した。長男兄もハワイへ移民していた。父はその後帰国した。

渡航後、1916 年マウイ島のハイクヤウルマル耕地のパイナップル畑で 1 年間働いた。1917 年頃、オアフ島ホノルル市のヌアヌ地区の山手へ移り、3 年間白人のハウスメイド（家庭奉仕人）の仕事をした。夫もそこでヤードボーイをしていた。その後、ホノルル市でレストランを経営した。

戦前マウイ島プネネに移り、サトウキビ耕地で働いていたが、1 年後に太平洋戦争が勃発した。1970 年ごろからマウイ島カフルイに移り住み現在に至っている。移民当時は出稼ぎのつもりであったが、18 歳で結婚して後は永住の決意をした。一世で日本国籍のま

までである。

兄弟姉妹は男性が3人、女性が5人で計8人である。子供は男性が5人、女性が1人で計6人である。孫は9人、ひ孫は1人いる。同居家族は2人である。家屋・宅地とも自己所有である。仏壇も墓地もある。宗教は仏教で、パイヤにある臨済宗のお寺の信徒である。家庭での言語はすべて日本語を使用している。沖縄料理は時々作っていた。魚料理が好きである。

邦字新聞は購読しない。日本語のラジオを聞き、テレビを観る。同郷人団体はマウイ沖縄県人会に属する。模合には参加していない。銀行は利用する。戦前、戦後も郷里へ送金したことはない。戦後沖縄へ戦災救援物資として、食料・衣類を送った。郷里への一時帰国は、戦後1952年が最初で、合計2回ある。

(9) 比嘉ウシ

1900年(明治33)8月10日生。マウイ島ワイルクで面接聞取。調査時92歳。中城村字島袋出身。父比嘉松・母マツヨの長女。夫は10歳年上の比嘉太郎(タルー)。那覇市尋常高等小学校を4年生で中退し、のち喜舎場尋常高等小学校を卒業した。実家は農業であった。

1918年(大正7)18歳のとき、ハワイ移民のおじの呼び寄せで、再渡航の父と2人でハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると、比嘉ウシは中城村字島袋480番地に本籍のある戸主亀助弟松の長女で、18歳のときハワイへ、父(45歳11ヵ月で再渡航)、母マツヨ(47歳3ヵ月)と3人の旅券が大正7年5月7日に下付されている⁵⁾。那覇港を出航し、神戸を経由して約1週間でホノルル港に着いたが、渡航の船名は忘れた。ホノルルの移民検査所では2日間いたが、父と娘の身分であったが、氏名は番号で呼ばれた。

渡航後、1918年マウイ島ワイルクのサトウキビプランテーションで働いた。キビ畑で草取りや水かけの仕事であった。午前5時起床、朝食は沖縄的な味噌汁、野菜のウブサーですませ、6時に耕地へ向かった。昼食は11時30分に米やおかずの弁当ですませ、午後4時には住宅へ帰った。その後、マウイ島ワイアラのサトウキビプランテーションで10年間働いた。再びワイルクのサトウキビプランテーションへ戻り仕事をした。移民当時は出稼ぎのつもりであったが、その後永住を決意し、アメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は女性のみ2人である。子供は男性が6人、女性が3人で計9人である。孫は10人いる。同居家族は5人である。家屋・宅地は自己所有である。仏壇はあり、墓地もワイルクに個人墓がある。宗教は仏教で、ワイルクの浄土宗の本願寺の信徒である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言を話し、親子・家族は日本語と沖縄方言を併用している。沖縄料理はよく作り、ウンブサー・アシティビチスープが好きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』と『ハワイパシフィックプレス』を購読する。日本語のラジ

オを聞き、テレビを観、雑誌を読む。同郷人団体はマウイ沖縄県人会と、約20年前に創設されたハワイ二世の与那原良永・ロイ氏が会長を務める琉球文化クラブに所属する。

模合は子供たちの名義になっているが、親睦のため月一回参加している。銀行は利用していない。郷里への送金は戦前・戦後とも行った。戦後沖縄へ戦災救援物資を送ったことがある。郷里への一時帰国は戦前1回、戦後1回合計2回ある。

（10）沢岷安義

1902年（明治35）6月3日生。マウイ島ハイクで1992年9月20日面接。調査時90歳。北谷村字野国641番地出身。父沢岷安厚・母マカトの2男。妻カマド（旧姓久場、越来村出身一世、2歳年下）。屋良尋常高等小学校を卒業した。卒業後4、5年間実家の農業の手伝いをした。現在米軍の嘉手納飛行場になっているが、サトウキビとサツマイモの畑があり、家屋はカヤブキであった。土地は肥沃であった。

1919年（大正8）12月25日17歳のとき、父安厚の呼び寄せで単身ハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると、沢岷安義は北谷村字野国641番地に本籍のある戸主安厚の2男で、17歳5ヵ月のときハワイへ父の呼び寄せで、大正8年12月24日に旅券が下付されている⁶⁾。那覇港から船で鹿児島へ着き、汽車で神戸へ行き、そこで約1ヵ月間も滞在した。やっと12指腸虫検査も通過し、天洋丸（大洋丸か）でハワイへ向かった。ホノルル港到着時は父が迎えに来て、上里旅館で2泊した。

渡航後、1919年マウイ島プネネ十三番キャンプで働いた。1920年同島ハイクのウルマルのパイナップル耕地で約3年間働いた。その土地は親戚の沢岷氏の個人所有のパイナップル畑であり、仕事は除草やパイナップルもぎをした。一日の生活は、米と味噌汁の朝食をすませ、6時に耕地へ出発、午前中の仕事をし、12時に米・味噌汁・うどんの昼食をとった。午後2時にコーヒータイムがあり、6時には耕地を後にした。当時、沖縄では3食ともサツマイモで、正月に米を食べる程度であったが、ハワイでは毎日米が食べれた。

1923年マウイ島ワイルクのサトウキビ工場で働いた。賃金は日給1ドルで、超勤手当では一時間10セントであった。1935年同島ハイクでサトウキビ栽培の請負いの仕事をした。また、サトウキビやパイナップルのトラック運搬の仕事もした。サトウキビの工場は戦後1963年に閉鎖された。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが、戦後永住を決意した。1952年50歳の時にアメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が3人、女性が1人で計4人である。子供は男性が3人、女性が4人で計7人である。孫は20人、ひ孫は16人いる。家屋・宅地共に自己所有である。不動産として約7,000坪の土地を所有している。仏壇があり、墓はワイルクに購入した。宗教は仏教で臨済宗の信徒である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言を話し、親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理は娘たちがよく作り、アシティビチが好きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』と『ハワイパシフィックプレス』を購読する。日本語のラジオを聞き、テレビを観、雑誌を読む。同郷人団体はマウイ沖縄県人会に所属する。老人クラブもあり、毎週（火）（木）の8時30分から12時まで集会有り、食事もある。

模合は親睦のため、月一回14、15人で集まり、10ドルから20ドルのものに参加している。銀行も利用する。郷里への送金は戦前・戦後とも行った。戦後沖縄へ戦災救援物資を送った。郷里への一時帰国は戦後1951年、1959年か60年頃を含めて3回ある。

(11) 安里カナ（旧姓知念）

1901年(明治34)6月10日生。マウイ島ハイクで1992年9月20日面接聞取。調査時91歳。美里村字古謝64番地出身。父知念武戸・母カメの2女。夫安里永久は中城村字喜舎場出身。美里尋常高等小学校を卒業す。卒業後実家で農業の手伝いをしていた。畑があり、サトウキビを栽培していた。

1916年(大正5)8月16日と記憶しているが、15歳のとき父の呼び寄せで、弟の知念精吉と2人で沖縄を出発してハワイへ向かった。外務省の「海外旅券下付表」によると、知念カナは美里村字古謝64番地に本籍のある戸主知念武戸の2女として、父の呼び寄せで米領布哇(ハワイ)へ15歳4ヵ月で、大正5年10月5日に旅券が下付されている。また弟の知念精吉は姉のカナ同様、戸主武戸長男として、父の呼び寄せでハワイへ12歳1ヵ月で同日旅券が下付されている⁷⁾。渡航船は大洋丸かサイベリア号であった。

渡航後、1916年父のいるマウイ島ワイアユアのサトウキビ耕地で働いた。18歳のとき同島チーフアのサトウキビ耕地へ移った。1920年19歳の時に安里永久と結婚し、マウイ島ハイクのサトウキビ耕地へ移り、以後同地に住み続けている。74歳まで現役で働いた。サトウキビプランテーションの仕事は、耕地までトラックで運ばれ、送り迎えの便があった。朝6時には朝食をすませ、トラックに乗り込み耕地へ向かった。サトウキビ畑の仕事をし、夕方5時頃には帰宅した。夕食は7時頃でごはんとおかずで、主食は米であった。風呂に入ったりして9時頃には就寝した。子育てと併せて女性の仕事が多かった。移民当時から永住のつもりであった。1952年頃アメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が1人、女性が2人で計3人である。子供は男性が5人、女性が3人で計8人である。孫が22人、ひ孫が8人いる。家屋・宅地とも自己所有である。仏壇も墓地もある。墓地はマカワオに個人墓を購入した。宗教はキリスト教でプロテスタントである。家庭での言語はすべて日本語である。沖縄料理をよく作り、アシティビチ・牛肉・魚・トーフ・ゴーヤーが好きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』を購読している。日本語のラジオを聞き、テレビを観る。所属団体は約20人の会員がいるペンクラブに入っている。月2回お弁当会の集会有る。

模合はかつて参加したことがある。銀行は利用していない。送金は戦前父母が帰国して

いたので郷里へ送った。戦後も正月・7月には20, 30ドルを送った。戦後は郷里へ戦災救援物資の小包を2回送った。郷里への一時帰国は戦後夫と一緒に1回ある。

(12) 比嘉ツル（チル）

1895年（明治28）5月12日生。ハワイ島ヒロ市で1992年9月22日に面接聞取。調査時97歳。越来村字古謝出身。父仲本朝光・母ツルの長女。夫比嘉真勢は明治18年5月10日生で、父松仙・母ウトの2男である。教育歴はなし。本人のパスポートによると、比嘉ツルは1912年（大正元）9月17日の旅券下付で、17歳4ヵ月のときの夫の呼び寄せで、ハワイへ渡航したことになる。外務省の「海外旅券下付表」によると、比嘉チルは越来村字久田572番地に本籍のある非戸主眞勢妻で、夫の呼び寄せとしてハワイへ17歳4ヵ月のとき、大正元年9月18日に旅券が下付されている⁸⁾。横浜港から出航したが、船名は覚えていない。

渡航後、1912年ハワイ島ヒロから6マイル離れて、夫が働いていたワイケウカの耕地のサトウキビ畑と工場と働いた。その後ハワイ島でトーフ作りの仕事をしていた。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが、その後永住を決意した。一世で日本国籍のままである。

兄弟姉妹は男性が3人、女性が3人である。子供は男性が5人、女性が3人で計8人である。孫は27人、ひ孫は32人、やしゃごは2人いる。現在ヒロ市の老人病院に世話になっている。家屋・宅地ともに自己所有である。仏壇はないが、墓地はある。宗教はキリスト教でパプテストである。家庭での言語は夫婦は沖縄方言を話し、親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理は88歳の米寿のころまではよく作っていた。チャンプルー・ゴーヤー・アシティビチ・アンダギー・サツマイモが好きである。

邦字新聞は購読していない。日本語のラジオを聞き、テレビを観る。同郷人団体はフィオキナワ（ハワイ島の沖縄県人会）に所属する。

模合はかつて参加したことがある。銀行は利用していない・郷里への送金は戦前も戦後も行った。戦後オキナワへ救援物資としての食料品などを送ったことがある。郷里への一時帰国は5回ある。

(13) 島袋ウタ

1903年（明治36）10月6日生。ハワイ島ヒロ市で1992年9月23日に面接聞取。調査時88歳。具志川村字安慶名8番地出身。夫島袋長太（田）。平良川尋常高等小学校を卒業。卒業後実家の農業の手伝いをしていた。サトウキビ畑が広がり、家屋はカヤブキであった。交通は安慶名から那覇までは自動車や客馬車が通っていた。

1924年（大正13）6月22日20歳のときに夫とともに、最後の呼び寄せ移民として、

ハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると、島袋ウタは中頭郡具志川字安慶名8番地に本籍のある戸主島袋茂太(40歳4ヵ月、再渡航)の妻で、20歳8ヵ月のとき夫と同行としてハワイへ大正13年6月11日に旅券が下付されている⁹⁾。横浜港からコレア号で出航したが、乗船者には沖縄県出身移民も多かった。ハワイ到着後はホノルルの移民局では、3日間も目と十二指腸虫病の検査で滞在させられた。

渡航後、1924年ハワイ島九回船耕地のアマウルキャンプ №4のサトウキビ耕地で働いた。同耕地で1941年の太平洋戦争勃発時まで働いた。その後、九回船耕地のワイナクキャンプへ移動し、1957年までサトウキビ耕地での仕事に従事した。キビ耕地の仕事はサトウキビ畑の草取り(ホーハナ)、葉をむしる(ホレホレ)、茎を切る(カチケン)、茎をかつぐ(ハッパイコウ)であった。賃金は日給で75セントであった。耕地へ朝6時に出発し、11時になるとアルミ製の弁当箱にもってきたごはんとトーフなどのおかずで昼食をとった。午後キビ畑で働き、子供も居たので3時には住居に帰った。その後夕食の支度や洗濯などをして、7時から8時の間に、ごはん(米)と肉・豆・野菜のおかずやおつゆで夕食をとった。後片付けをして、子供の世話をし、就寝は11時ごろであった。毎日そのような生活の繰り返しであった。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが、その後永住の決意をした。一世で日本国籍のままである。

兄弟姉妹は男性が3人、女性が3人で計6人である。子供は男性が3人、女性が5人で計8人である。孫は17人、ひ孫は12人いる。同居家族は4人である。家屋・宅地とも自己所有である。仏壇も墓地もある。墓は郡政府の共同墓地のアライにある。宗教は仏教で、浄土真宗のヒロ本願寺の信徒である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し、親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理はよく作り、トーフやカンダバー(サツマイモの茎や葉)ジュージーが好きである。老人の集まりにはよくアシティビチがでる。

邦字新聞は『ハワイパシフィックプレス』を購読している。日本語のラジオを聞き、テレビを観る。同郷人団体はフイオキナワ(ハワイ島沖縄県人会)に所属する。80歳以上の老人からは会費を徴収しない。趣味のクラブもあり、(火)(木)と週2回集会に通っている。

模合は月一回10ドルのものに参加している。銀行も利用する。郷里への送金は戦前・戦後とも行ったことがない。戦後沖縄へ戦災救援物資を送った。郷里への一時帰国は戦前渡航3年後の1927年に1回、戦後は1989年を含めて8回ある。

(14) 前武當ゴゼイ(めーんとう・ごぜい)

1895年(明治28)8月4日生。ハワイ島ヒロ市で1992年9月23日に面接聞取。調査時97歳。与那城村字平安座1180番地出身。父前武當政喜・母○○の2女。夫前武當亀代(戸主蒲多3男)。平安座尋常高等小学校を卒業す。卒業後、実家の漁業を手伝い、魚売りの仕事な

どをした。

1920年（大正9）3月29日24歳のとき、夫の呼び寄せで単身ハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると、前武當ゴザアは与那城村字平安座1180番地に本籍のある蒲多3男亀代の妻で、夫の呼び寄せでハワイへ24歳7ヵ月のとき、大正9年3月27日に旅券が下付されている¹⁰⁾。夫とは写真による見合い結婚でハワイで結婚式をあげた。横浜港をサイベリア号で出航して、ホノルル港に着いたとき、夫が迎えに来てくれた。なお、外務省の「海外旅券下付表」によると、前武當亀代は与那城間切平安座村1180番地に本籍のある戸主蒲多の3男で、明治20年8月10日生、農業の目的でハワイへ、明治40年1月22日に沖縄県庁より旅券が下付されている¹¹⁾。

渡航後、1920年ハワイ島ククイハイレの十五回船キャンプのサトウキビ耕地で働いた。午前6時弁当をもって耕地へ出発し、キビ刈りなどの仕事をして、午後4時頃には帰宅した。賃金は日給75セントであった。1941年同島ホノムへ移り、サトウキビ耕地で働いた。1960年ハワイ島ペペケオのサトウキビプランテーションで働いた。1984年以降同島ヒロ市のパウカに住んでいる。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが、その後永住の決意に変わった。一世で日本国籍のままである。

兄弟姉妹は男性が2人、女性が2人で計4人である。子供は男性が5人、女性が2人で計7人である。孫は16人、ひ孫が13人いる。家屋・宅地とも自己所有である。仏壇はあり、墓地もアライ地区にある。宗教は仏教で、ホノムにある本願寺の信徒である。家庭での言語はすべて日本語を使用している。沖縄料理はよく作り、ソーメン・ウブサー・サーターアンダギーが好きである。

邦字新聞は購読していない。テレビは日本語の放送のときよく観る。同郷人団体はフィオオキナワ（ハワイ島沖縄県人会）に所属する。

模合はかつて参加したことがある。銀行は利用していない。郷里への送金は戦前・戦後とも行った。戦後沖縄へ戦災救援物資として、教会をとおして古着などを送った。郷里への一時帰国は戦後一回ある。

（15）知花カマ

1899年（明治32）12月30日生。ハワイ島ヒロ市で1992年9月23日に面接聞取。調査時92歳。読谷山村字波平90番地出身。父知花幸吉・母マカの2女。夫は知花幸太郎。読谷山尋常高等小学校を5年生で中退。母の身体が弱かったため、実家の農業の手伝いをさせられた。サトウキビ畑があり、住居はカヤブキであった。1919年（大正8）4月23日19歳のとき、単身夫の呼び寄せでハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると、知花カマは読谷山村字波平90番地に本籍のある戸主幸太郎の妻で、夫の呼び寄せでハワイへ19歳3ヵ月のとき、大正8年4月22日に旅券が下付されている¹²⁾。那覇港

を出航，神戸を經由し，横浜港を出航し9日間でホノルル港に着いた。自由移民でハワイへ渡航していた夫が迎えに来てくれた。

渡航後，1919年以降ハワイ島ヒロ市郊外のパパイコウ耕地のサトウキビプランテーションで働いた。1941年以後はハパイコウ耕地の一部であるパウカアのアールエフデーワンのサトウキビプランテーションで仕事をした。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが，その後永住を決意した。1958年6月4日にアメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が2人，女性が3人で計5人である。子供は男性が4人，女性が4人で計8人である。孫は25人，ひ孫は18人いる。家屋・宅地とも自己所有である。宗教はキリスト教でホーリネス教会へ通っている。仏壇はないが，墓地はアライ地区にある。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し，親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理はよく作り，カンダバージュシー・アシティビチが好きで，コンブ・トウガンもよく使う。

邦字新聞は購読していない。ラジオもテレビも聞いたり観たりするのに，それほど関心がない。同郷人団体は沖縄県人会に所属する。

模合は参加していない。銀行は利用する。郷里への送金は戦前正月などに送ったことはあるが，戦後はない。戦後沖縄への戦災救援物資を送ったことはない。郷里への一時帰国は戦後で，1956・75・76年の3回ある。

(16) 比嘉秀幸

1901年（明治34）10月20日生。ハワイ島ハビーで1992年9月24日に面接聞取。調査時90歳。読谷村字楚辺（大木）1428番地の出身。父比嘉秀業・母カメの2男。妻カメ（旧姓稲嶺）は北谷村字平安山出身，戸主稲嶺盛忠の2女，大正7年ハワイ移民，父の呼び寄せによる。古堅尋常高等小学校を4年生で中退す。

1912年（大正元）7月11歳のとき，父の呼び寄せでハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると，比嘉秀幸は中頭郡読谷山村字楚辺1428番地に本籍のある戸主秀業の2男で，父の呼び寄せとして，ハワイへ大正元年7月10日10歳9ヵ月のとき旅券が下付されている¹³⁾。那覇港を出航，神戸で目の検査をし，横浜港をサイベリア号で出航し11日間でホノルル港に着いた。沖縄では3食ともサツマイモで，白いごはんは^{シチビ}節日のときしかでなかったが，船の食事はごはんがでた。ハワイの移民局ではほとんど検査もせず，一日で上陸できた。当時，写真結婚による呼び寄せ夫人も多かったが，検査は簡単であった。

渡航後，1912年にハワイ島のコハラ地区のハビーのサトウキビ耕地で働いた。11歳から15歳まではマホコナでサトウキビの水かけの仕事をした。その後もこのハビーで80年近くもの間，サトウキビプランテーションに雇われて働いた。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが，戦前の段階で永住の決意をした。10年以上も前にアメリカ国籍を取得

した。

兄弟姉妹は男性が2人、女性が1人で計3人である。元琉球政府行政主席の比嘉秀平とはいとこの関係にある。子供は男性が5人、女性が3人計8人である。孫が15人、ひ孫が6人いる。同居家族は3人である。家屋・宅地とも自己所有である。敷地内にサトウキビ工場跡の煙突がある。不動産としては土地を所有している。仏壇も土地もある。宗教は沖縄の祖先崇拜である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し、親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理を作り、アシティビチ(ウァーヌヒサ)が好物である。

邦字新聞は購読していない。日本語のラジオを聞き、テレビ・ビデオをよく観る。同郷人団体はコハラ沖縄県人会に所属する。毎年新年会がある。

場合は戦前に一口5ドル、10ドルのものに参加したことがある。銀行は利用していない。郷里への送金は戦前・戦後とも送ったことがない。戦後沖縄へ戦災救援物資として、県人会をとおして古着などを送ったことがある。郷里への一時帰国は1971年が最初で計2回ある。

(17) 玉城亀吉

1907年(明治40)3月21日生。ハワイ島コナで1992年9月24日に面接聞取。調査時85歳。高嶺村字大里16番地出身。父玉城蒲戸・母カナの4男。妻ツルは大正3年1月19日生、高嶺村字真栄里出身の賀数箒次の長女で、ハワイ二世である。高嶺尋常高等小学校を5年生で中退。

1919年(大正8)12月20日13歳の時、母の呼び寄せで単身ハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると、玉城亀吉は島尻郡高嶺村字大里16番地に本籍のある戸主蒲戸の4男で、母の呼び寄せとして12歳9ヵ月のとき、大正8年11月20日に旅券が下付されている¹⁴⁾。沖縄を出発し、神戸で目と12指腸虫の検査があり、横浜港を出航し、1週間でホノルル港へ着いた。船の乗客には結婚した女性も多くみられた。移民局には母と兄が迎えに来てくれた。ホノルル港から船に乗ってハワイ島のヒロへ向かった。

渡航後、1919年ハワイ島の北部パウハウ耕地へ行き、同地のサトウキビ耕地で2年間働いた。プランテーションのキビ畑での草取りの仕事で、賃金は一日50セントであった。1921年15歳のとき、ハワイ島パуйロのサトウキビ耕地へと移り、4年間サトウキビの切り出し(カチケン)や運搬(ハッピーコウ)の仕事をした。

1928年21歳のとき、ハワイ島コナに移住し、3年間コーヒー栽培の仕事をした。1931年24歳のとき、同島ホロロアで6エーカーの土地をリースして、バナナやアボカドの果樹栽培をした。1941年から3年間太平洋戦争中は義父の賀数箒次とコーヒーの栽培をした。戦後もコーヒーを主体にバナナ・アボカドなど果樹の多角経営の栽培をした。1991年に引退して息子がその仕事を引き継いでいる。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが、

戦後永住を決意した。不景気でお金の儲からない時期もあった。8年ほど前に帰化市民としてアメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が4人、女性が2人で計6人である。外務省の「海外旅券下付表」によると、亀吉の兄である戸主玉城蒲戸の2男蒲六は20歳9ヵ月のとき、母の呼び寄せにより、大正8年2月26日にハワイへ、3男秀吉は16歳11ヵ月のとき、同様大正8年4月12日にハワイへ旅券が下付されている¹⁵⁾。子供は男性が1人、女性が2人で計3人である。孫は3人、ひ孫は6人いる。仏壇はあるが、墓はない。家屋・宅地とも自己所有である。宗教は仏教で真言宗の信徒で、コナの御大師さんを拝む。家庭での言語は夫婦は日本語と沖縄方言を併用し、親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理をよく作り、アンダーギーが好きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』と『ハワイパシフィックプレス』を購読している。日本語のラジオを聞き、テレビを観る。かつては沖縄県人クラブ、日本人クラブに所属していたが、今はその組織がない。コナ農業組合に所属している。

模合には参加していない。銀行は利用する。郷里への送金は戦前には行わなかったが、戦後は行った。戦後、沖縄への戦災救援物資として品物を送った。郷里への一時帰国は1960年・90年の計2回ある。

(18) 新川盛亀

1908年(明治41)8月6日生。ハワイ島パウイロで1992年9月25日面接聞取。調査時84歳。西原村字内間266番地出身。父新川山・母〇〇の3男。父が3男で2男兄の新川康栄の養子となる。妻シゲは6歳年下でハワイ二世で、父は中城村字津覇出身の新垣ふっせい。西原尋常高等小学校を卒業し、高等科1年生のとき中退した。実家は農業で畑があり、家屋はカヤブキであった。

1923年(大正12)6月14歳のとき、単身おじ新川康栄の呼び寄せにより、ハワイに渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると、新川盛亀は中頭郡西原村字内間266番地に本籍のある戸主亀弟康栄養子で、14歳7ヵ月のとき義父の呼び寄せにより、ハワイへ大正12年6月11日に旅券が下付されている¹⁶⁾。出発前神戸では目と12指腸虫の検査があったが不合格となった。その治療のため、2週間も滞在させられた。宿泊したところは今泉旅館と記憶している。横浜港を出航してコレア号でホノルル港へ着いた。ホノルルの移民局では子供であったので、父がハワイ島のコハラから出迎えに来るまで5日間も留め置かれた。その時の移民局での通訳の1人が県出身の田島氏であった。

渡航後、1923年ハワイ島コハラのコハラサトウキビ耕地で、いとこと2人ワーターボーイとして働いた。その後コハラのコハラで高岡グラージのメカニク(機械工)として働いた。1928年ハワイ島パウイロへ移動し、現在まで64年間同地でサトウキビ栽培などの農業を

している。移民した当時から永住のつもりであった。一世で日本国籍のままである。市民権があるので不自由はしない。キビ畑など20エーカーの土地があるが、それは子供の名義で取得している。

兄弟姉妹は男性が3人、女性が1人で計4人である。子供は男性のみの3人である。孫が3人、ひ孫が1人いる。同居家族は3人である。家屋・宅地とも自己所有である。1984年不動産として土地を約2万ドルで購入した。仏壇も墓地もある。宗教は仏教で浄土真宗である。家庭での言語は夫婦は日本語と英語を併用し、親子・家族は日本語を使用している。沖縄料理はよく作り、豚のスープやゴーヤーが好きである。

邦字新聞は『ハワイパシフィックプレス』を購読している。英語の新聞も読んでいる。ラジオは聞かず、日本語・英語のテレビを観る。同郷人団体はハワイ沖縄県人会に所属する。同郷人がよく集まり、歌ったり踊ったり、太鼓をたたいたりして楽しんでいる。

場合は以前親睦のため、パウイロの地域で5ドルや10ドルのものに参加していた。銀行もよく利用する。郷里への送金は戦前も戦後も行った。戦後、沖縄への戦災救援物資を送ったことがある。郷里への一時帰国は、1976年を含めて計3回ある。

Ⅲ. アメリカ合衆国本土・カナダにおける県系移民の現地調査（1993年）

アメリカ合衆国本土における沖縄県系移民の調査はカリフォルニア州ロサンゼルス市で1993年9月10日から16日までの7日間、サンフランシスコ市で9月23日から29日までの7日間行った。また、カナダにおける県系移民の調査はレスブリッジ市で9月16日から19日までの4日間、バンクーバー市で9月19日から23日までの5日間行った。

現地調査に際し、ロサンゼルス市では北米沖縄県人会、サンフランシスコ市では北カリフォルニア沖縄県人会、レスブリッジ市ではレスブリッジ沖縄県人会、バンクーバー市ではバンクーバー沖縄県友愛会の会長はじめ、会員の皆様の全面的な協力により、県系移民の面接聞取調査および資料収集がスムーズに行えたことに対し、改めてお礼申し上げる。

現地調査の成果の概要については、前号に掲載したので、本項ではより詳細に記す¹⁷⁾。以下、全行程20泊21日間をフィールド用の「調査ノート」をもとに、団体および個人としての現地面接聞取調査の実施状況を、日時を追って記述する。

①9月10日（金）：那覇市から福岡・成田経由、ロサンゼルス市までの旅行日。琉球大学法文学部地理学教室の5人の教員（石川友紀を研究代表者に、研究分担者として中山満・島袋伸三・前門晃・石丸哲史）は出発前那覇空港国内線に集合。教室関係者の見送りをうけ、那覇空港を日本航空922便で出発（12時00分）、福岡空港国内線に到着（13時17分）した。福岡空港では国際線へ移動し、同空港を日本航空382便で出発（14時13分）、成田国際空港に到着（15時39分）した。成田空港を日本航空062便で出発（18

時07分)、日付変更線を越えてロサンゼルス国際空港に到着(現地時間11時53分)した。ロサンゼルス空港では北米沖縄県人会会長サンキ(山城)浄次氏ほか会員の出迎えをうけ、「ニューオオタニホテル」へ直行した。ホテルで県人会役員と今後の移民調査の打ち合わせをする。午後7時ごろより北米沖縄県人会主催による歓迎晩餐会に出席し、約30人の県系人と懇談を行った。ホテル帰着22時ごろ。

②9月11日(土):ロサンゼルス市滞在,調査日。調査員各自が県人会会員の案内で、県出身移民の一世や帰米二世の自宅を訪問し、約120項目の質問票を兼ねた「個人面接調査票」により、テープレコーダー・カメラも使用して約2時間、面接聞取調査としてのインタビューを行った(以下調査方法はすべて同じ)。個人としては県系人二世金城武男氏の案内でホテルを9時23分に出発、戦前渡航一世仲田久常氏(大正5年生)ほか面接聞取調査を行った。ホテル帰着22時22分。

③9月12日(日):ロサンゼルス市滞在,調査日。午前中個人で面接聞取調査を実施。午後団体で北米沖縄県人会館(1501 5th Ave. LA)を訪問、会員と懇談、資料を収集する(写真1)。ホテル帰着21時07分。

④9月13日(月):ロサンゼルス市滞在,調査日。新県人会館建設募金委員長神山修旭氏の案内で、午前中リトルトウキョウの老人施設「東京タワー」を訪問、日系人のための病院兼アパート施設内を視察、移民一世の面接聞取調査をした。午後県人一世山内昌安氏経営の「ひのいちトーフ」工場を見学した(写真2)。

⑤9月14日(火):ロサンゼルス市滞在,調査日。調査日。午前『羅府新報』社へ表敬挨拶



写真1 ロサンゼルス市の
(旧)北米沖縄県人会会館
(1993年9月12日撮影)



写真2 ロサンゼルス市の沖縄県出身
移民一世の山内昌安氏経営の
「ひのいちトーフ(HINOICHI)」
(1993年9月13日撮影)



写真3 カリフォルニア州南部の
インペリアルバレー（帝国平原）の
大平原の農地と灌漑施設
(1993年9月15日撮影)



写真4 カリフォルニア州南部
インペリアル地区の日系人の
移民資料館の展示場
(1993年9月15日撮影)

撻に行き、情報を収集した。戦後県人一世斎藤陽子さん（旧姓翁長）宅を夕方訪問、午後10時15分まで懇談した。

⑥9月15日（水）：ロサンゼルス市滞在，調査日。県人会会員の一世米国連邦政府農務省森林局地質鉱物資源調査員国吉信義氏の案内で，前夜に出発，途中サンベルニーノのモーターで一泊して，戦前日本人移民が農業で貢献をしたカリフォルニア州南部のインペリアルバレーの大平原の現地実態調査を目指す（写真3）。コーチャバレー，バレリージェインを経由し，大湖のソルトンシーを通過し，ソルトンシティに到着した。インペリアル地区で歴史移民資料館として1993年10月3日開館予定の日系人の資料等を見学，説明を受ける（写真4）。同館を15時に出発，メキシコ国境に近いアリゾナ州ヒラ砂漠の砂丘展望台に到着した。気温40℃以上の猛暑のなか，インペリアル平原を途中休憩しながら帰路につく。ホテル帰着23時ごろ。

⑦9月16日（木）：アメリカ・ロサンゼルス市からカナダ・レスブリッジ市までの旅行日。団体としてホテルを安里氏の車で午前10時に出発，ロサンゼルス空港へ向かう。空港では県人会会長のサンキ氏・神山修旭氏・当銘貞夫氏の見送りを受ける。ロサンゼルス空港をエアカナダ764便で13時25分に出発，カナダのカルガリー空港に15時53分に到着した。乗り換えてカルガリー空港をエアカナダ1909便で18時20分に出発，レスブリッジ空港に18時59分に到着した。同空港ではレスブリッジ沖縄県人会会長浦崎政吉氏ほか役員の出迎えをうけた。同地は秋で気温13℃。真冬は－30℃まで冷えるとのこと。県移民一世の上地安彦氏が経営する日本人レストラン「王将（O-SHO）」へ直行，戦後一世移民10人と夕食懇談会となった（写真5）。「レスブリッジロッジ」ホテル到着



写真5 レスブリッジ市で戦後移民一世
上地安彦氏経営の日本人レストラン
「王将 (O-SHO)」
(1993年9月16日撮影)



写真6 レスブリッジ市で戦前移民一世の
西真鶴朝計氏の奥さんとの面接聞取
調査状況
(1993年9月17日撮影)

22時46分。

⑧9月17日(金): レスブリッジ市滞在, 調査日。県人会会長浦崎氏の案内でホテルを9時06分に出発, 午前中県系一世・二世の面接聞取調査を行う。午後戦前県移民が多く住んでいたハーディービルを見学, 戦前移民一世西真鶴朝計氏の奥さんを面接聞取調査した(写真6)。夕方戦後移民一世で県人会役員金城嘉孝氏の沖縄空手道「専武館」を見学後, 自宅で面接聞取調査を行う。ホテル帰着21時ごろ。

⑨9月18日(土): レスブリッジ市滞在, 調査日。県移民一世金城氏・長浜氏と婦加(カナダ)二世ジミー大城氏の3人の案内で, 5人の調査員が2台の車に分乗, ホテルを9時12分に出発, ハーディービルを経由して, 戦前の県移民の鉱山労働者の現場と居住地跡に向かう。カナディアンロッキー山脈へ近づき, バッファロークリフ, インディアンリザーブ, ビンチャククリークを経由して, 夕方炭鉱地跡に到着した。写真撮影をして帰路につく。夜レスブリッジ市到着。夕食後, ホテル帰着22時30分。

⑩9月19日(日): カナダ・レスブリッジ市からバンクーバー市までの旅行日。浦崎氏の案内でホテルを9時40分に出発, マウンテインビューの日本人墓地を見学する。同墓地にカナダにおける県初回移民の牧志安能・妻キヨの墓があった。ガーデンビルロッジ・老人ホーム, 日本庭園を見学し, レスブリッジ空港に11時25分に到着した。空港では県人5家族10人の見送りをうける。レスブリッジ空港をエアカナダ1904便で12時53分発, カルガリー空港に13時22分到着。カルガリー空港をエアカナダ183便で14時22分発, バンクーバー空港に14時23分に到着した(時差1時間)。空港ではカナダ沖縄県友愛会副会長宮城盛功氏ほかの出迎えをうけ, 「シェラトン・ラ



写真7 バンクーバー市で戦後県企業移民
一世奥間健氏経営のサーモン工場
(1993年9月20日撮影)



写真8 バンクーバー市でカナダ沖縄県
友愛会会長嘉陽宗弘氏宅での夕食懇談会
(1993年9月22日撮影)

ンドマークホテル」に15時40分にチェックインした。高層ビルの30階の部屋で、市街地全体が見渡され、眺めが良かった。その後約2時間戦後一世移民で県人会役員の大山盛照・神里弘・具志堅興暉氏と今後の面接聞取調査の打ち合わせをした。

⑪ 9月20日（月）：バンクーバー市滞在，調査日。午前中バンクーバー市，バーナビー市で，戦後一世移民の面接聞取調査を行う。午後ハイイクで戦後県企業移民奥間健氏が経営するサーモン工場を視察した（写真7）。夕方大山盛照氏宅を訪問，戦後移民の大山氏の父と両人に面接聞取調査をした。ホテル帰着22時38分。

⑫ 9月21日（火）：バンクーバー市滞在，調査日。気温15℃。大山氏の案内でホテルを9時54分に出発，一日戦後移民の玉代勢亘氏など面接聞取調査を実施した。夕食しホテル帰着22時50分。

⑬ 9月22日（水）：バンクーバー市滞在，調査日。団体として金城嘉孝氏の案内でホテルを9時10分に出発，午前カナダ先住民のトーテム像のあるスタレー公園，サケ養殖場を見学した。その後ブリティッシュコロンビア大学の地理学教室を訪問，施設を見学する。午後バンクーバー市パウエル旧日本人街の日本語学校を視察し，職員と懇談す。近くの英国風の蒸気時計・ガス灯のある通りは観光客が多かった。夕方カナダ沖縄県友愛会会長嘉陽宗弘氏宅で同会会員と夕食懇談会となった（写真8）。ホテル帰着22時40分。

⑭ 9月23日（木）：カナダ・バンクーバー市からアメリカ・サンフランシスコ市までの旅行日。大山氏の車でホテルを9時23分に出発，バンクーバー空港へ向かう。同空港をデルタ航空1400便で11時43分に出発し，ポートランド経由でサンフランシスコ空港に14時

33分に到着した。空港では北カリフォルニア沖縄県人会会長新垣徳吉氏、会員酒巻裕子（旧姓翁長）さんたちの出迎えをうけた。『北米毎日』『日米時事新聞』（『日本時事』）の新聞社へ、表敬挨拶のため訪問した。その後日米文化会館で岡省三氏と面談した。宿泊先の「都（みやこ）ホテル・サンフランシスコ」に17時07分に到着した。ホテルで県人会主催の歓迎会が開かれ、多くの県人会員と19時30分より懇談した。翌日からの調査の打ち合わせを行った。

- ⑮ 9月24日（金）：サンフランシスコ市滞在，調査日。サンフランシスコ市郊外高級住宅が立地するサウスリート市で，戦後移民一世当銘由盛氏が経営する「すし蘭（SUSHIRAN）」を訪問，面接聞き取り調査を行った。午後当銘氏の案内で周辺を見学し，サンフランシスコ市へ戻る。夜ホテルに帰着。
- ⑯ 9月25日（土）：サンフランシスコ市滞在，調査日。戦後移民一世の山城よし子さんの案内で，ホテルを10時23分に出発，サンフランシスコ市郊外のサニーベル市に11時42分到着，15時35分まで二世のヒガシ（東）フランク氏（旧姓東江）氏の自宅で，面接聞き取り調査を行った。帰路スタンフォード大学を見学し，サンディエドロ市に到着，山田八重子さんの面接聞き取り調査をした。ホテル帰着18時40分。
- ⑰ 9月26日（日）：サンフランシスコ市滞在，調査日。県人会会長新垣氏の案内で，サンフランシスコ市郊外サンノゼ市へ向かう。同市で宮城仁風会の上原松美さんに面接聞き取り調査を行う。アメリカ人男性を含む会員の琉球舞踊の稽古場を視察する。サンフランシスコ市へ戻り，酒巻さん宅で20人余の県人会員と懇談会を行った。ホテル帰着20時55分。
- ⑱ 9月27日（月）：サンフランシスコ市滞在，調査日。戦後移民前里ナンシー・美代子さんの案内で，ホテルを10時07分に出発，オルナット地区に11時22分に到着す。同地の県人会員婦米二世阿嘉レイモンド・良弘氏の自宅で，半日かけて面接聞き取り調査を行い，移民関係資料を収集した（写真9）。阿嘉氏宅を19時30分に出発，ホテル帰着21時55分。
- ⑲ 9月28日（火）：サンフランシスコ市滞在，調査日。酒巻さんの案内でホテルを出発，午前中戦前渡航の一世藤岡貞子さん（旧姓玉城，母方石川，明治39年生）を訪問，面接聞き取り調査を行った。午後前里ナンシーさんの案内で，沖縄県系移民との夕食懇談会に出席する。戦前移民の二世塚本（旧姓大工廻^{ダクジャク}）メリー・つる子さんと面談，自筆の本を寄贈される（写真10）。ホテル帰着21時30分。



写真9 サンフランシスコ市郊外オルナット地区で県人会員帰米二世阿嘉レイモンド良弘氏宅における移民関係資料収集状況
(1993年9月27日撮影)



写真10 サンフランシスコ市で県系移民との夕食懇談会。前に座せる女性は二世塚本（旧姓大工廻）メリー・つる子さん
(1993年9月28日撮影)

⑳ 9月29日（水）：アメリカ・サンフランシスコ市から日本・成田空港を經由、沖縄・那覇市（那覇空港）までの旅行日。サンフランシスコ市の「都ホテル」を10時11分に出発、サンフランシスコ空港に10時47分に到着した。同空港を日本航空の001便で13時18分に出発、日付変更線を越えて9月30日（木）成田空港に15時08分に到着した。リムジンバスで羽田空港へ移動、東京の気温28℃。羽田空港を日本航空909便で20時18分に出発、那覇空港に22時33分に到着した。予定通り、アメリカ合衆国本土・カナダの北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究の一環としての現地調査、20泊21日の全行程を終了した。

IV. 北米県系移民現地調査における主な収集資料

1. ハワイ

- ① 「日本帝国海外旅券」（安里永久・崎原ナベ・米須清太郎・比嘉仁亀・比嘉真勢・比嘉チル・宮城カマ）
- ② 「渡航許可証」（比嘉真勢・比嘉チル・宮城カマ・米須清太郎）
- ③ 「居住証明願」（比嘉真勢）
- ④ 崎原貢博士論文等（「沖縄県人ハワイ移民史」「劣悪移民のすすめ」「アメリカにおける沖縄研究の状況」ほか）
- ⑤ 比嘉武信氏論文等（「沖縄県人80年の歩み」ほか）
- ⑥ 新川ジューン・洋子さんの論文等（「沖縄系二世移民の横顔ーパッシ・きくえ・宮平ヤング上院議員」ーほか）
- ⑦ 島福カメさん宗教関係資料（ノロ・「天宝」ほか）



図1 沖縄県出身戦前移民一世大工廻朝信氏の1916年（大正5）発行の「日本帝国海外旅券」

- ⑧『ハワイパシフィックプレス』邦字新聞切抜き記事（県系移民の人物紹介ほか・月刊紙）
- ⑨山里勇善編著（1919）『布哇之沖縄県人』実業之布哇社
- ⑩ハワイ報知社（1992）『アロハ年鑑—ハワイのすべて—』第8版，初版1977年発行。
- ⑪日布時事社（1941）『日布時事布哇年鑑』（布哇年鑑並人名住所録）

2. アメリカ合衆国本土

- ①「日本帝国海外旅券」（大工廻朝信）（図1）
- ②「渡航許可証」（大工廻朝信）
- ③「外国旅券下付事実証明」（伊芸孝太郎・伊芸カメ）
- ④塚本（旧姓大工廻）メリー・つる子関係資料（本・系図ほか）
- ⑤北米沖縄クラブ（1955）『全米沖縄系人名住所録』1955年12月現在（全米沖縄系人口並に職業調査ほか）
- ⑥北米沖縄クラブ（1958）『南加沖縄系人名住所録』1958年10月現在
- ⑦北米沖縄クラブ（1982）『北米沖縄クラブ会員住所録』1982年
- ⑧北米沖縄県人会（1990）『北米沖縄県人会会員住所録』1990年
- ⑨地図（「ロサンゼルス」「サンフランシスコ」「南北アメリカ現況図」ほか）

3. カナダ

- ①浦崎政吉氏論文等（草稿「第一回カナダ移民・戦後」（1968年）、「沖縄からレス市近郊への一般移住及び農業研修生関係」（1968年～1982年）ほか）
- ②レスブリッジ沖縄県人会（1992）「レスブリッジ沖縄クラブ名簿」1992年
- ③バンクーバー沖縄県友愛会（2002）『カナダ沖縄県友愛会創立25周年記念誌』

注

- 1) 拙稿(2011)「第5部第5章沖縄移民史の課題と展望」『沖縄県史』各論編第5巻・近代, pp. 463-477, 沖縄県教育委員会を参照。
- 2) 本研究プロジェクトの調査の計画・実施としての研究の目的・組織・準備状況, 実施計画・方法, 調査実施については, 拙稿(2013)「北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究－ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に（Ⅰ）－」『移民研究』第9号, pp.41-62, 沖縄移民研究センターを参照。
- 3) 資料の出所は沖縄県公文書館史料編集室(1999)『沖縄県史』資料編8・近代2, 自由移民名簿・自1908(明治41)年至1920(大正9)年, 沖縄県教育委員会, p.735である。
- 4) 資料の出所は前掲注3)と同じ, p.82である。
- 5) 資料の出所は前掲注3)と同じ, p.571である。
- 6) 資料の出所は前掲注3)と同じ, p.687である。
- 7) 資料の出所は前掲注3)と同じ, p.448である。
- 8) 資料の出所は前掲注3)と同じ, p.185である。
- 9) 資料の出所は沖縄県公文書館史料編集室(2005)『沖縄県史』資料編19・近代6, 自由移民名簿, 自1921(大正10)年至1925(大正14)年, 沖縄県教育委員会, p.235である。
- 10) 資料の出所は前掲注3)と同じ, p.707である。
- 11) 資料の出所は沖縄県立図書館史料編集室(1994)『沖縄県史料』近代6, 自明治40年至明治44年, 移民名簿Ⅱ, 沖縄県教育委員会, p.138である。
- 12) 資料の出所は前掲注3)と同じ, p.646である。
- 13) 資料の出所は前掲注3)と同じ, p.184である。
- 14) 資料の出所は前掲注3)と同じ, p.687である。
- 15) 資料の出所は前掲注3)と同じ, p.633とp.647である。
- 16) 資料の出所は前掲注9)と同じ, p.148である。
- 17) 前掲注2)のpp.48-50を参照。

(いしかわ とものり 琉球大学名誉教授・人文地理学・移民学)

日本移民の本質究明

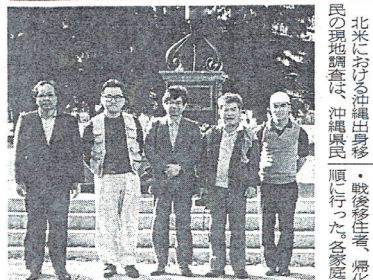
琉大北米沖縄移民調査団

1世らにアンケート実施



が行われたのは今回が初めて、北米各団の沖縄移民から、少数ない先住者一世代も強い要請もあり、先住者も初めての移民調査といふこと、盛衰している調査に極めて協力的だった。特にレス系系人社会は存命中の戦前移民者も少なく、戦前移民の聞き取り調査も困難になり、移民関係の補助を受け、沖縄移民調査の散発が心配を以て本質究明を目的として行われたもの。

北米における沖縄出身移民の現地調査は、沖縄県民調査団(理事長石川友紀教授・一行五人)が九月十六日から四日、アルバータ州レス系系市に滞在、県系人へのアンケート・インタビュー調査を行った。調査に先立って、先住者(上地移民)とレス系系市(有志)との懇談、鹿上石川市長から同クラスへ金一封が寄付された。



アルバータ州レス系系市マウンテンビューに滞在した移民調査団一行

アンケート調査は、戦前・戦後移民者、帰化二世の順に行った各家を訪問した。調査は九月十日、ロサンゼルスを切り、調査本営の、レス系系市に二番目の訪問地。そのあと、サンバー、サンフランシスコを調査し九月三十日に帰国した。

石川友紀琉大教授を団長とする海外学術調査団一行、助金を北米にける県出身

ロスでも移民学術調査

琉大地理学的研究で、調査団一行、助金を北米にける県出身者移民に関する地理学的研究が目的、今回北米二世

琉球大学北米調査団一行が本社を訪問

北米へ移民した沖縄県民の生活を研究調査に来米した、琉球大学北米沖縄移民調査団(石川友紀教授一行五人)が十四日、サンキョウ次沖縄県人会会長の案内で本社を訪れた。

十九日から二十日までロサンゼルス、カナダのパンクバー市、カルガリー市で沖縄県出身者と会い、その後の様子を聞く。

北米方面の調査は九年度から始まり、今年二回目になる。現在までに判明したことは、△予想以上に元氣よく働いていた△日本一の長寿県だが、それが国外でも長寿を誇っている△米国内では土地に溶け込んでいる傾向などをあげていた。

一方、南米方面では一九七八年から、アルゼンチンを中心に調査が続けられている。そのらの傾



前列向かって左から、鶴袋伸三、石川友紀(隊長)、中溝俊二、後列左から石丸哲史、サンキョウ県人会会長、前門光の諸氏。

向としては、△出身者が独自の経世が日本へ行き、理解を新たにし、経済を作り、一つの社会を作るまで、たので祖国として見る目が違つて、今後も継続して調査を続け、特

図2 調査の状況を伝える新聞記事

左上:『琉球新報』1993年10月26日付, 右下:『羅府新報』1993年9月18日付。